

---

# 名無しの影使い

サソリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名無しの影使い

### 【Nコード】

N4195Z

### 【作者名】

サソリ

### 【あらすじ】

ある日、目を覚ますと自分が何者なのか覚えていなかった少年魔導士のお話。

原作、設定を遵守しませんので御注意下さい。

## プロローグ（前書き）

フェアリーテイル〜影〜第一章の再構成版になる予定です。

## プロローグ

「……………」

ゆっくりと重たい目蓋を開けると、爛々と輝く太陽に雲一つない青い空が見えた。

近くに川があるのだろうか、静かに水が流れる音が聞こえる。

ああ、落ち着くな

久しぶりだ、こんなに暖かい自然を感じるのは……………それにしても中々にリアルな夢だな。

このままでは任務に行く気がなくなるよ。何時までも、このまどろみの中に居たい。

……………しかしそう言うわけにもいかんだろう。早く夢よ、覚めないか。私は　しないといけないのだから……………。

そう考えると、私はゆっくりと目を閉じ、暖かい自然が溢れる夢の世界に別れを告げた。

…

…

…

……はずだった。

次に目を覚まし、目蓋を開けた時に見えた光景は爛々と輝く太陽に雲一つない青い空だった。

……ああ確信したね、これは夢じゃない。

体を温める太陽の光に突き抜けるそよ風。

そして寝転がっている体を包み込んでくれず、痛みつけるかのよう  
に固く自己主張する岩盤。

手を延ばせば、ぴちゅんと水に触れた。流れているから川か？……  
冷たいな。まさか、こんな近くにあるとは……。

それにしても、夢がここまでリアルなものか。

「はあ……どこだよ……ここは……」

ゆっくりと上半身だけ起こす。すると私の目には覆い茂る木々と清流のごとく流れる川が見えた。

……知らない場所だ。

それにしても、よくこんなにゴツゴツした岩盤で呑気に寝ていられたものだ。

体のあちこち痛いぞ。しかし、しかしだ、今はそんなことはどうでもいい。

何故こんな場所にいるのだ。それにこんな真つ黒なスーツなんぞ着ていたか？

私は　　にいたは……あれ？……　　？いや　　……？

……？……私はどこにいたんだっけ？

…それより私は何者だ？私の名前は？

…

…

…思い出せないだと……

……まさか記憶喪失だとも言うのか？

いやいや、ただ気が動転して混乱しているだけだろう。もう少し冷静になって考えてみよう。

自分の名前ぐらいはすぐに思い出せるだろうよ。  
そう考えた私は岩盤に寝転がったまま、思考に没頭する。

……しかし……一向に自分自身のことは何も思い出すことは出来なかった。

……ややこしいことになった……。

……しかし、しかしだ。そう焦ることはないな。川や木のこと分かるんだ。と言うことは一時的な記憶喪失だろう。

……まあ、何時か思い出すぞ……

それより、これからどうするかだな。このまま寝転がっていても意味はないし、ウジウジ考えていてもどうしようもない。

今は、現状の把握をしなければ二進も三進もいかない状態なのだ。ここがどこであるかも分かっていないからな。

さて考えるより即行動だ。そう考え、立ち上がった私は、辺りを見回したが自然以外何もなかった。

人工物がない、どこかの森みたいだな。何故ここにいるかはわからないが

【ぐう〜】

……探索の前に、まずは腹ごしらえをするか。

ふむ、ちょうど川辺にいるんだ。魚でも食べるとするか。

そう思考しながら川をじっと眺めると、光に反射されて私自身の姿が映し出された。

肩口まで伸びた真っ白な髪に、赤色の瞳……。男とも女とも取れる子供のように幼い顔立ち。120センチほどの小さい身体。

……誰だコイツ……

って、それを考える前に飯だ、飯。腹が減っては何もできないからな。

思考を逸らし、川を眺めると魚が泳いでいるのだろう。いくつかの魚影を見つけることができる。

よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と言ったところだ。

さて魔法でも使って……。ふむ……。魔法のことは忘れていないようだ。何とも都合の良い記憶喪失のようだな。

…  
…  
…  
と言っか覚えていないのは自分自身のことだけみたいだな。

っとそれより飯だ。はてさて、魔法はきちんと発動するかな？

【影槍】

ぼそっと小さく呟き、黒光りする魔方陣を足元に展開させる。

すると、その行為によって絶命した魚が、ぷかぷかと浮かんできた。どうやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して、見事に魚の真ん中を貫いたようだ。

すでに絶命し、影槍によって幾らか体を失い軽くなった魚は沈むことなく、ぷかぷかと浮かんでいる。

「ふむ、一丁上がりというヤツだな」

そしてまた魔方陣を展開させる。次は自分の影から、にゆるにゆると漆黒の手を数本出す。

そして浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来、上出来

さてお食事の時間だ

「いただきますす!!!」

…

…

…

「……知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。どこだ、ここは……

確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やっと起きたかい」

私が知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？もしゃ……ここは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベットを置いてるものだ。

「聞いているのかい？」

「っ！？……む……何だ、誰だおまえは……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか誰だ？この婆さんは……。

私にいきなり話しかけてきたのは、Yシャツと長いスカートの上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。

ピンク色の髪の毛を頭の後ろでお団子にして金色の髪飾りで止めている。

たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人にその態度は酷いもんだね。こちらこそ聞くよ。あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？私は助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川の川魚を生で食べただろう。あそこの川魚は毒を持っていてね。……ワタシが偶然通り掛からなかったら、あんた今頃あの世行きだよ」

むっ……そう言えば少し思い出してきたぞ。

確か魚を食べて苦しかったような………ということはこの婆さんの言うことは本当のことか？

しかし、人に出会えるとは運がいい。これで現状がわかるな。

「そうか。礼をいってやる。ところで、おまえは誰だ。ここはどこだ。さっさと答えないとぶち殺すぞ？」

「………礼儀がなってない子供だね。しかもなんて口の聞き方だい！」

「おい、ババア？聞いてんのか？お前は誰だと聞いているんだ！」

「相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい！」

ちっ、それぐらいで怒ってんじゃねえよ。短気すぎじゃないのか、この婆。

つか……名前か……覚えてねえんだよな。ふむ、偽名でも名乗るか。

うーむ

…

…

…

…

…

…

…はっ！？

これだ！この名前しかない！！！！

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい？」

何！？なめているだと？一生懸命考えた名前だぞ。

「本当のことだ。何だその眼は？人様の名前に文句あんのか？  
ああ？」

「はあ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ！」

「……………」

何だ、婆さん？そんなに私の目を見ないでくれ。……恥ずかしいじゃないか。

「あんた……もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを！？」

心を読んだのか！？コイツア驚いた！？

「はあ、厄介な生き物を拾ってしまったよ。それにネーミングセンス無さ過ぎだ、この子供は……………」

何だ、そのやれやれみたいなポーズは……………。

「それよりもお前の名前は何だ。私は答えたんだ。さあ言え！【こ

「ちんー!】ぎゃっ!？」

「さっきから年上に対して礼儀がなってないよ!」

ぐおお、何で力で叩きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出来て来てるじゃないか。

ぐおおおお、

ジンジンするう

「……ワタシの名前は　　だ」

「あん?頭さすってたから聞いてなかった…もう一回言え「何だつて?」……ってください。お婆様」

恐怖!?そんな目で睨まなくてくれよ……それにしても何て目だ。きつと他の人間にも恐れられてんぞ、この婆さん。

てか、この婆さんには逆らわない方がよさそうだな。命がいくつあっても足りないような気がする。

「まあ、いいだろう。ワタシの名前はポーリュシカだ」

……ポリーリユシカ……知らない名前だ。

「そしてここはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？

……そんな国、聞いたことないぞ。

どこだ、ここは！？

## 虚ろ（前書き）

く影くとは違い年代とか矛盾があるでしょう。

## 虚ろ

婆さんに拾われて数ヶ月が経つ。しかし記憶の方はさっぱりだ。

残念ながら全くと言って良いほど、何も思い出すことは出来ない。

思い出すために色々と試行錯誤はやっているんだ。

朝の森林浴は日課だろ。それに昼はベッドでゴロゴロ。夜は瞑想などをしている。

むう……これだけ一生懸命に頑張っているのだが、一向に思い出す気配はない。

くそう！頑張っているのに！どうして！

そんな風に毎日が大変な私である。ちなみに現在は初めて目を覚ました場所。つまり川がある場所で森林浴をしている。

空にはたゆたう雲が流れ、そよそよと吹く風が心地良い。

ああ、記憶を思い出しそうだ。

「……あなた、働きな……」

「えっ？」

そんな風にいつも通り頑張っていると、婆さんの声が聞こえた。

「……何だ、幻聴か……」

「もう一度言っよ。あんた働きな」

「はい？」

どうやら幻聴ではなかったようだ。私の視界には無表情で何やら目つきが怖い婆さんがいた。

…

…

…

爛々と太陽が照り、雲がたゆたう朝の時間。フィオーレ王国にある東の森にはナナシとポーリュシカがいた。

「……なんだ幻覚か……」

虚ろな目で空を見上げていたナナシは、ポーリュシカを見てそう呟

くと再び空を見上げ始めた。

それを無言で見っていたポーリュシカはつかつかと歩み寄り拳を握ると

「痛っ!?!」

ナナシに向けて振り下ろした。

「あにすんだ!ババア!」

涙目で叩かれた頭を抑えているナナシは口を開くが

「毎日、毎日、グータラグータラ!少しは働いたらどうなんだい!」

「馬鹿やろう!私は記憶を思い出そうと頑張っているんだよ!見てみるよ、この気合いの入った目を!」

「……虚ろだね。あんた記憶喪失を逆手に取っては働きたくないだけだ。言い訳はいいから来な!」

「違っ!?!本当に記憶を思い出そうとお!痛い痛い痛いつ!?!やめて!」

小柄な体であるナナシは抵抗らしい抵抗も出来ずにポーリュシカに引きずられて森の奥へと消えた。

「嫌でいやる。働きたくないでいやる。」

「さっさと薬草を集めて来な！」

## 認識（前書き）

この時期のナナシはまだまだガキですので、影々を読まれている方は違和感があるかも

## 認識

「だあ！薬草なんぞ知るか！見付けれる訳がねえだろうが！」

とある日の午後。分厚い本を片手に森の中を歩くナナシの姿があった。

「円月草だあ！？んなもん。どこにもねえじゃねえか！くそが！」

開かれたページには、薬草らしき絵と説明が書いてある。どうやらそれを見ながら薬草を探しているようだ。

「大体、私には記憶を思い出すと言う使命があつてだな。こんなことをしてる場合では……」

ぶつくさと文句を言いながら探すナナシであったが、一向に目的の薬草は見つからなかったのである。

「ダメだ……今日は諦めよう。適当に嘘付けばバレねえだろ」

…

…

…

あゝはいはい。薬草なんて見つかりませんでした。

大体、薬草の知識なんざないんだよ。こんな絵が書かれた本だけで探すのは無理だっつーの。

つたく、あの婆め！

帰ったら満腹になるまで飯を食ってやるからな。

見てろよ、肉を食っ……ん？誰だ、アイツ。

私が婆さんの愚痴などを呟きながら歩いていると、婆さん家の前に誰かいた。

……白髪に身長は私より低い、年老いた老人だ……。

誰だアイツは？こんな森の奥で婆さん以外の人間は見るのは初めてだ。

婆さんは人間嫌いらしいからな。あまりと言うか全くと言って人間と接しないのだ。

ん？あれ？そう言えば私は大丈夫なのか？

もしかして私は人間と認知されていないのか！？

ひ、ひでえ。

……だから穀潰しだの。グータラだの。ズボラだの、言われるんだな……。

くそう、私を人間と認めさせてやる！

そのためにも何か人間として確立していることを実証しなければ！

「はっしょん！」

む……思考が逸れていた。ジジイのクシャミのおかげで現実に戻れたようだな。

ふむ……ところであのジジイは誰だ？

婆さんに友がいるのは有り得ない。また婆さんを訪問するのも有り得ないだろ。

人間との触れ合いは街の店員とかぐらいしか……。

……ま、まさか、婆さんのストーカーか！？

さっきも言ったように婆さんも時々、街に買い物に出るからな。そう言うことは無いとは言えない。

こ、コイツア、特ダネだよ！ストーカーなんて初めて見たぞ！

むっ？よく考えると、これはチャンスではないか？

そうさ！あの怪しいジジイを倒せばいいんだ！そうすれば婆さんも私に感謝して薬草探しをさせなくなる。

うむ、そうと決まれば即実行だ。

ふっふっふ、私は接近戦が得意なのだ。気絶させてボコボコにしてやんよ。

【転影移！】

そう小さく呟き、自分の影に沈むとストーカージジイの影へと転移した。

∴

∴

∴

影へと潜ったナナシは老人の影からぐぷりと姿を現した。一方、小柄な老人はナナシが姿を現したことに気付いていない。

どうやら気配を感じ取ることができないぐらいにナナシの隠密性は高いようだ。

小柄な老人は終始、鼻水が垂れてくる鼻を嘍っている。どうやら風邪を引いているらしい。これも気付くことが出来ない要因の一つだろう。

一方、ナナシは影から鈍色な光るナイフを取り出すと、柄の部分をつ躑躅なく小柄な老人に向けて横薙ぎした。

( 気絶しろ )

その行為は淀みなく、小柄な老人の首筋に向かっていたが

「マスター危ない！」

「むっ？おおっ！？」

もう少しで首筋に達しようとした時、どこからか少女の瘖高い声が響き、小柄な老人はナイフを寸前で避けることが出来た。

「ちっ」

避けられたことに舌打ちをしたナナシは、後方に下がろうとするが

「あ？」

背後から接近した誰かが剣を振り下ろしていることに気付き、そのまま振り返ることなく

「マスターを狙った曲者が！」

【ガキン！】

急いで影から出し、もう片方の手に持ったナイフで受け止めた。

ガチガチと銀色に輝く剣と鈍色に光るナイフの鏢迫り合う音が響く。

(前にはジジイ。後ろには……)

瞬時に頭を回転させ状況を理解したナナシは、

「ふっ」

小さく息を吐いて力を抜き、鏢迫り合いに負けたように見せ掛け

「おら！」

再び体を半回転させながら、勢い良く腕を振り剣を弾き返した。

ガキンっ！という疝高い音が響く。ナナシは罅迫り合いを征したが、油断することなく体勢を取りながら睨む。

「…………ガキだと…………」

そこにはセミロングの赤髪の少女が居た。髪は三つ編みにしている。

そして上半身に鎧を付け、下半身にはスカートを纏っていた。

また少女は弾かれた剣をなんとか握っているが、手が痺れているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「エルザ！」

マスターと呼ばれた老人は少女の名前を言い、お返しとばかりに、少女エルザは

「ここはお任せを！マスターを狙った不届きものは私が排除します

！

そう言い、弾かれたことによって崩れた体勢を立て直しながらナナシに剣を向けた。

## 認識（後書き）

短くてすみませんが、こんな感じでお送りしたいと思います。

前回は今回も書き下ろしなので後から修正します。

## エルザ vs ナナシ

対峙するナナシとエルザの二人であったが、対峙する時に流れる特有の静けさが漂う前に

「あ？不届き者だと？ふざけんじゃねえ！ここは私の家だぞ。不審者が！」

そう叫んだナナシによって戦いは始められた。ナナシは腰を落とす、素早く動きながらエルザに襲い掛かる。

「おらよ！」

「くっ！？」

左手で刃渡り15センチほどのナイフを振るい、刺し、時には薙ぐ。その度にエルザも同様に払い、穿ち、時には避ける。

「はあ！」

「おらっ！」

エルザが振るえば、ナナシも振るう。その逆もしかり。

ガキンと何度も打ち合い時折、火花が迸りながら戦いは熾烈を窮め始めた。

(ちっ、拉致があかないな)

だが、まだ序盤であるにも関わらず、勝負が着かないことにイライラし始めたナナシは新たに動き出した。

「しっ!」

一度打ち合いを止めると、後方に下がりながら、素早く右手に持ったナイフを投げたのだ。

ナイフの軌跡は真っ直ぐエルザに吸い込まれるように向かってくる。

「むっ」

エルザは突如、飛来して来たナイフを剣で弾き飛ばす。そして再びナナシに接近しようとした時

「おせえよ!不審者!」

【影槍！】

「なっ!?!」

ナナシがそう唱えるとエルザの足元に出来た影から漆黒の槍が飛び出した。

【ガギッ】

すると、すぐに何かがぶつかり合う鈍く小さな音がした。

「し、しまった!?! 剣が!?!」

それはエルザの剣が根元から砕け壊れた音だった。

影から飛び出した鋭く尖った槍が剣の柄を貫き、刃と柄を切り離れたのだ。

それを見たナナシは勝負が着いたと感じたのだろう。

不敵に笑い、器用にナイフをくるくると回しながら喋り掛ける。

「格好、装備からして、お前は剣士だよな。剣無き剣士は何が出来る?」

「何？」

「降参した方が身のためだぞ。不審者が！」

そう言い再び襲い掛かるうとするが

「フェアリーテイルの魔導士を舐めるな！」

【喚装！】

そうエルザが唱えると、虚空からすうと一本の剣が出てきた。

先程エルザが持っていた剣と全く同じものだ。それを素早く掴んだエルザは剣を振るった。

「はぁ！」

「魔導士だと!？」

余裕を出し笑みを浮かべたまま接近していたナナシは、剣を虚空から出したエルザに驚き、反応が遅れ攻撃を許してしまった。

「ちい!？」

ギリギリで避けるものの何本か切り取られた髪がはらはらと舞い落ちる。

(あ、危なっ!?)

額に汗を欠いたナナシはエルザに喋りながら睨み付けようとするが

「まさか魔導士だったとは思わなかつ「ふん!」ぎゃぴっ!?!」

エルザはナナシの言葉を聞くことなく、剣の柄で頭を叩き、いとも簡単に気絶させた。

「……………あー……………」

地面に倒れたナナシはピクピクと動いているが、一時の間は目を覚ますことはないだろう。

何とも呆気ない結末の戦いであった。

「全く、手こずらせて」

「何者かの?ズズッ」

今までエルザ対ナナシを傍観していた老人は鼻を嚙りながら近付く。

「分かりません。ただマスターを狙ったことだけは判明しています」

「うむむ」

風邪の為だろう。顔を赤くさせ鼻水を垂らしながら悩む老人だったが、

「あっそう言えば……ここは自分の家だと言っていました。しかしここはポーリユシカさんの家のはずです」

(うむう、自分の家？ポーリユシカの？……まさかの……)

ふと、エルザが思い出した内容に老人が思考しようとした時

「人ん家の前でドンパチとは度胸があるね。マカロフ」

木で出来た家から扉を開けてポーリユシカが出て来た。

その顔は非常に不機嫌そうに歪められている。その姿に老人マカロフは冷や汗を流す。

「よ、よお。久しぶりじゃな、ポーリュシカ。実はの、この小僧が……」

「その子は私の預かり子だよ。全く、バカな子なんだから。バカに付ける薬はないからね。そのまま寝かしときな」

「ほう、お主が子を世話とはのう。いやいやまさか……のう？」

「……あんたも風邪を引いてバカになったようだね。早く入りな！風邪なんかで死にたいのかい！」

何か含みのある言い方をしたマカロフに、片眉を上げたポーリュシカはそれだけを言う。

そして扉を開けたままイラついたように歩き、家の中へと入っていった。

その背中では言葉通り、早く来いと語りかけているようだ。

対してマカロフは

「そ、そ〜怒るな。待つんじゃ、ポーリュシカ！おお、エルザよ、その子を頼むぞお〜」

「は、はい」

慌てながらポーリユシカを宥める言葉を発した後、隣に佇んでいたエルザにナナシのことを頼むと家へと入っていった。

「全く、どうして私が……」

残されたエルザは、はあと溜め息を吐いた。

「あれぐらいで気絶するとは……全く……世話が掛かる奴のようだな……」

気絶したナナシの顔を見ながらそう呟く。そして、まだ少し痺れる手でナナシの足を掴み、ズリズリと引っ張りながら家へと入っていた。

## エルザ vs ナナシ (後書き)

短くてすみません。次からは日を開け、纏めて出します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4195z/>

---

名無しの影使い

2011年12月15日02時45分発行